

NPO 法人

全日本語ネットワーク

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3

国分寺マンションB-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) http://japankatarinet.jp/

2019. 4. 13 発行

ニュース

「音」としての語り、そして猫は犬にはなれない事

古屋和子（東京都杉並区）

何故貴女は、琵琶を使って語ったりするのか？ときかれる。いや、別に大した意味はありません。音が入ると、よりイメージが広がる事があるでしょ？音具を使うのはその為だし、琵琶は私が弾ける唯一の楽器だから。でも、琵琶の音はどんな話にも合う訳じゃないから、琵琶を使う話は少ないですよ、と言っても、絶滅危惧楽器なので、人の記憶にはかなり強く残るらしい。

ごく幼い頃、私が物語と出会ったのは、絵本からではなく、母の寝物語と、ラジオやレコードから耳に入る、古典・伝統の「語り物」や歌曲、などからだった。視覚や意味からではなく、聴覚から、時に触覚も伴って体に染み込んできたものだった。

初めて語りをしたのは30歳の時。文楽形式でなされた人形芝居で、尺八・琵琶と組んで、一時間半近くを一人で語る。当然義太夫を参考にした。義太夫のような節はない語りをするのだが、人形に呼吸を渡し、また受け取らなくてはならない。私達は若かった。毎日の様に喧嘩しながら、朗読でなく、バックミュージックでなく、声と音が、時に寄り添い、時に挑みあい、一体になって物語を作り上げる事、を模索した。そんな訳で、私にとって語りとは、初手から、伝統的な「音曲としての語り物」の流れの中にあった。時に現代的、前衛的な形をとることはあっても、この点に関しては、今も変わらない。

琵琶をならい始めたのはその時からで、一人で弾き語れる楽器だったし、三味線よりも自由で、風と木々の匂いがした。三十年前、北米の先住民を訪ねる旅を始めた時、琵琶を持っていった。その時、ある先住民の長老から言われた。「その楽器をいつも持って歩け。そして弾き語れ。そうすれば皆、お前が何者であるか、何を求めているかが解るから」以来、どこへ行くときも琵琶は旅の相棒、同行二人、である。無器用なので一向上手にならないが、自分の体に馴染んだ音が少しづつ出るようになってきたのが嬉しい。

その北米での旅で出会ったのがストーリーテリングだ。「如何に」語るかではなく、「何を」語るか、「何を」シェアしたいのか、が一番大切だという考え方は、技術的洗練に向かいたがるアジア的な発想にはなかったもので、肩の力が一気に抜けた。同時に、お前は何者か、と常に問われるし、私は私でしかないのだ、猫は犬にはなれないのだ、と常に自覚する必要もあった。私の体の深い底から泡のように浮かび上がってきて弾けるもの、それに耳を澄ませて、それを差し出す。どんな形をとるにせよ、それが私の語りで、それに共振出来る人は、必ず、何処かに、いる、と信じて語るのがストーリーテラーだと、気づかされた。

